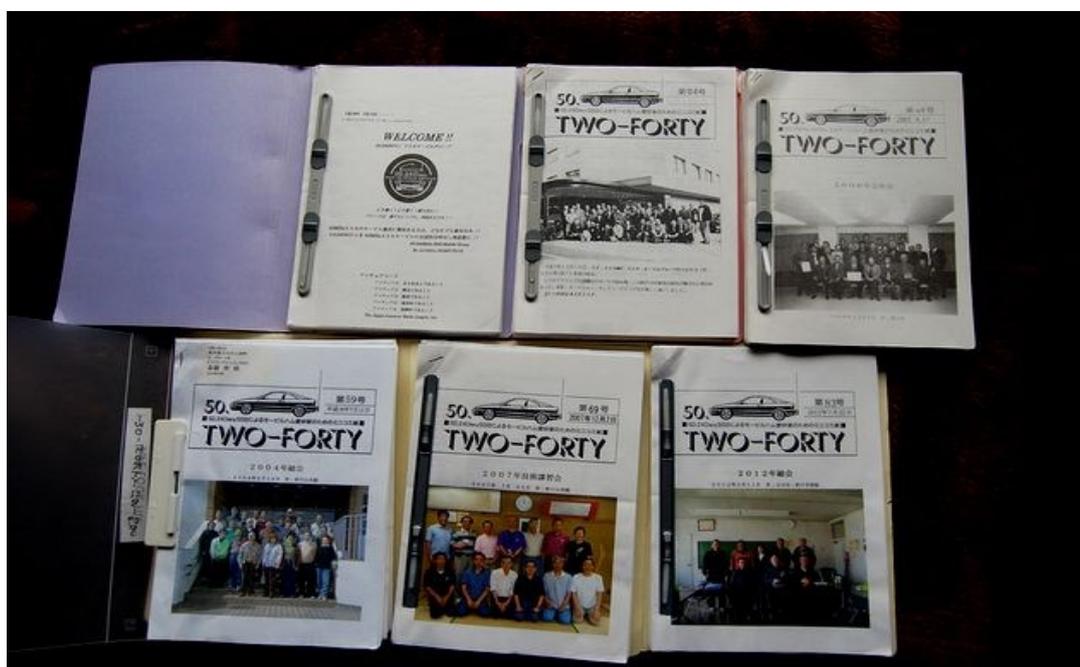


TWO—FORTYと共に

JA1WOB 齋藤 章

TWO—FORTY100号おめでとうございます。
一言でと云うと簡単ですが大変な事だと思います。
TWO—FORTYの第1号は、JJ1SXA局発行の(保存版)「50.240MHzSSBモービルグループ」に依りますと、昭和56年12月19日となっていますから今年で37年になります。
途中で休刊もあったようですが、年に、3月、7月、12月の3回発行で、100号までになった事は素晴らしい事と思います。真に継続は力なりです。
37年前の、1981年はアマチア無線局が52万局となり1994年の136万局のピークに向い急激にアマチア無線局が増加し始めた頃かと思います。
(私は、QRT状態で全く電波停止状態の頃です。)
我が家にある、一番古いTWO—FORTYは1993年の5月号です。
表題も「TOW FOR TEA」となっています。また、号番号もありません。
そして、同年7月の、TWO—FORTY誌で、20号になりその後継続しています。
(写真は我が家にあるTWO—FORTY誌の綴り)



私が、50.240SSBモービルグループに仲間入りしたのは、再開局した1990年の翌年の1991年の3月にロールコールに参加してからなので、今年で27年になりました。

240グループはモバイル運用を行うHAMの集まりなので、モバイルANTを取付けている車は想像していましたが、4月の小金井公園の花見の会で、長い5/8λANTを取付けた各局のモバイルを初めて見た時は、大変驚きました。

当初、240のQSOで話している5/8λANTは、144MHzの5/8λANTを50MHzの1/4λ相当で使用している物と思い込んでいました。

ところが、エレメント長は3.4m程もある本物の50MHzの5/8λでした。

長いANTをモバイルに取付けて走るの、昔からカッコイイと思っていましたので、こんなに長いANTを使うHAMがいるのには驚きました。

私のモバイルに取付けたANTは、1/2λの2.1mのエレメントが限界でした。

また、移動運用をする局も多くいましたから、移動ポイントや移動運用ノウハウも「TWO—FORTY」からの事前情報を得てから、実際に紹介された場所に行くことで、すっかり移動運用の虜になってしまいました。

元々、固定局にはタワーも無く、屋根馬プラス、4mポールに4エレのHB9CVで再開局しました。現在はマンションHAMなのでベランダに取付けツェップ型ANTやモバイルホイップなので、限界があります。

そこで、山や丘からの移動運用をすることで、パイルを浴びる楽しさや遠方の局とのQSOをする充実感は癖になりました。

そして、私が「TWO—FORTY」に投稿する内容も、電波伝搬実験を含めて移動運用の関係が多くなっています。

今回、あらためてTWO—FORTYを読み返してみると、アマチア無線の運用形態そのままが投稿されている事に気が付きました。

アンテナや無線機に関する**技術的**な記事、海外局との交信などの**DX**に関する記事、山岳移動や電波伝搬実験の**移動運用**関係、無線に関係ないいろいろな**ラグチュー**の様な記事でした。

また、表紙にある総会や技術講習会や忘年会の写真の人数が年々少なくなっているのが、寂しい感じがしました。

第34号の忘年会は45人、49号の忘年会は30人、61号の忘年会は20人、第76号が13人と年々少なくなり、記念すべき100号の忘年会は11人と寂しくなりました。

第34号は1996年の発行ですからアマ無線局が世界一の130万局のピークを迎えたころであり、100号の発行の2017年の末では43万局で57%減ですから、アマ無線の実情だと思いますが残念ですね。

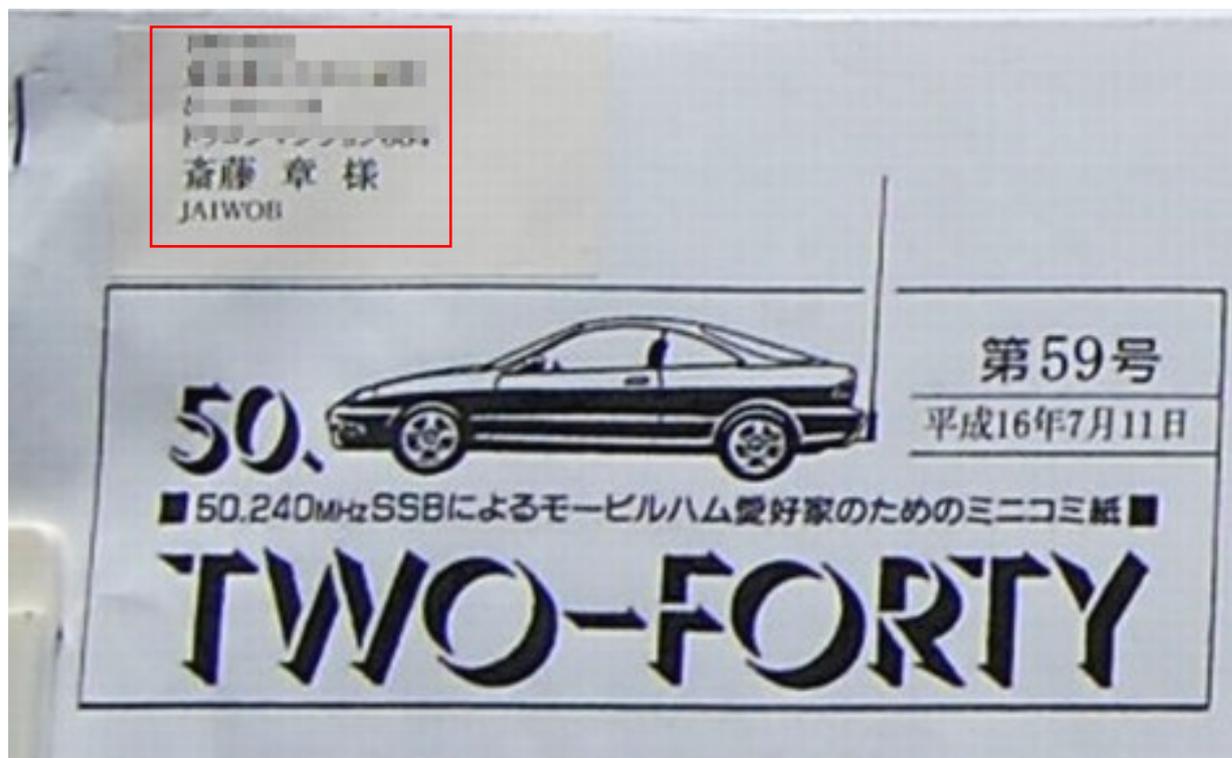
現在、TWO—FORTYはWeb配信となっていますが、以前は印刷、製本、配送を行っていました、その配送も100局近くあった事を思い出します。

TWO—FORTY発行の時期になると、砂川学習館に240各局が5～6局集合して、謄写版の印刷機で印刷して、ホッチキスで製本して、住所ラベルを封筒に貼る作業

を半日掛かりで行いました。

そして、まだインクの匂いのする出来立てのTWO—FORTYを誰よりも早く読むのが楽しみでした。

(写真は住所ラベルを張り付けたTWO—FORTY)



紙のTWO—FORTY綴りを見ている中に、1998年12月6日の号外で、TWO—FORTYがWEBにUPした事が伝えられていました。JJ1SXA池さんの協力でWEB版も20年前に既にあったのには驚きました。

我が家にある、紙のTWO—FORTYは2010年12月発行の第78号が最後になっています。

編集後記には、「今号でWEB版のみとします」とあります。

完全WEB版となって、8年経過しました。

これからも、末永くTWO—FORTY誌が発行される事を願います。

終わり